

## アイルランドとホスピス —メアリー・エイケンヘッドを顧みて—

豊田 謙二（熊本学園大学 社会福祉学部教授）

### Ireland and Hospice — Reminiscence on Mary Aikenhead — Kenji TOYOTA

#### ダブリンへ

ダブリン市に空路向かうために、英国のリーズ空港にいる。2015 年 9 月 15 日、搭乗前に通貨の両替が迫られていた。日本円をユーロに変えたい、その両替所では私の申し入れに慌てた様子である。円から直接ユーロへの両替経験がなく、一度ポンドに変えた上で、改めてユーロに変えたいという。英国は EU 圏でありながらポンドに固執し、他方かねてポンド圏であったアイルランドはユーロに移行している。両替率の多寡を考慮するよりも、隣国にもかかわらず、その通貨管理を巡る現実の政治性に気持ちが揺さぶられてしまう。なお、英国という表現のことであるが、正確には「グレートブリテン＝北アイルランド連合王国」、小論ではその略称は「英国」と表記したい。

リーズ空港から約 1 時間、ダブリン空港に機体が滑り込む。ここから、市内中心部にはタクシーで約 30 分、宿泊予定のホテルに横づけする。リヒイー川が東西に流れ、市域を南北に切り裂いている。その川に沿って町並みが整えられている。古い市街区ほど、レンガ色の建物、高さの統一、四角の窓、その統一性が鮮やかである。東西を流れる川を南北に横切る橋がある。その橋の南側に像が天上に向けて屹立している。19 世紀中葉における、イングランドに対抗した政治家ダニエル・オコンネルを顕彰する像である。その像に連なる橋に係る道は、オコンネル通りと称されている。



写真 1：D. オコンネルの像（撮影：豊田謙二）

ダブリンはアイルランド共和国の首都である。このダブリンに足を運んだのは、この地において世界で最初の近代的「ホスピス (hospice)」が開設されたからである。<sup>(1)</sup> 少し正確に言えば、19世紀半ば、今日「ホスピス」と呼ばれている「看取り」サービスを伴う「病院 (hospital)」が開設されたのである。この点について少し注釈をつけたい。「hospice」についてである。このダブリンにおいて尋ねるべき課題は、近代的「ホスピス」とは何を意味しているのか、なぜこのアイルランドの地において「ホスピス」が開始されたのか、つまり、換言すれば「ホスピス」の起源を問うことによってその意味を問いたいと思うのである。

本論に入る前に、アイルランド世界に誇る種類、ギネスビールとアイリッシュ・ウイスキーについて、まず紹介をしなければならない。少なくとも今日、世界に向けて発信を続けるアイルランド文化の発信の一つとして取り上げねばならない、と思うのである。そのギネスビールの醸造工場は、市街地から西へ徒歩約30分の地にあり、「ギネス酒造蔵 (Guinness Storehouse)」と称する観光酒蔵として、多くの観光客を呼び込む観光スポットの一つである。ギネスビールは、オーサー・ギネスが18世紀に醸造を始めたもので、「スタウト (Stout)」という濃厚な、黒ビールを代表する世界的な銘柄である。

「アイリッシュ・ウイスキー・博物館 (Irish Whiskey Museum)」は、市内中心街を貫流する「River Liffey」の沿岸近くにある。館内では蒸留の案内やアイリッシュ・ウイスキーの試飲などを楽しめるコーナーが整備されている。このアイリッシュ・ウイスキーは、スコッチウイスキー、アメリカのバーボン・ウイスキー (トウモロコシを原材料) などとともに、世界における銘酒の一つである。このスコッチウイスキー創設にあたって、アイルランドのアイリッシュ・ウイスキーの醸造技術が導入されたという点に注目すれば、アイリッシュ・ウイスキーはウイスキーでの世界最古の蒸留酒と言っていいであろう。<sup>(2)</sup>

## 1. アイリッシュ・カトリック

市中心部から東北に車で約15分、郊外に向けて走ると5階建ての箱型の建物に出会う。

「セント・ヴィンセント大学病院」である。その病院の「案内書」の冒頭にこう記されている。

ようこそ、セント・ヴィンセント・大学病院へ。この病院は、修道院・チャリティオブ・シスター (Religious Sister of Charity) の助力とともに、マザー・メアリー・エイケンヘッド (Mother Mary Aikenhead: 1787 - 1858) によって、1834年にセント・ステファン・グリーンに創設された。<sup>(3)</sup>

その案内書にはまた、以下のように創設の沿革が記されている。

この「病院」は1970年に現在のエルム・パークに移転した。引き続いて、1999年にセント・ヴィンセント・大学病院にその名が改称された。2003年に、セント・ヴィンセント・ヘルスケアグループ有限会社の一員となる。また、それはセント・ヴィンセント民間病院とダン・レオグヘレのセント・ミッチェル病院を含むことでもある。<sup>(4)</sup>

セント・ヴィンセント大学病院の前身は、セント・ヴィンセント病院であり、その歴史は1834年に遡る。その創設は、上記のように M. エイケンヘッドと当時の修道院、「慈善姉妹の会 (The Sisters of Charity)」に負うのである。M. エイケンヘッド、彼女について一言説明したい。彼女は、1787 年コーク (Coork) 市に生まれる。ダブリンから南へ電車で約 3 時間、フランス文化の影響にて洗練された町並みが形成されている。父は医者、プロテスタントである。彼女は父に誘われたが、貧しい人の集うカトリックの教会に通ったという。また、彼女は幼少の頃、フランス語を学び終生流暢なフランス語を使いこなしたともいう。<sup>(5)</sup>

その詳細は後に譲るが、この小論は、以下の M. エイケンヘッドに関わる個人史の著書を基にして展開したいと思う。



写真 2：コーク市の駅舎（撮影：豊田謙二）

それは以下の書である。アイリッシュ・修道院のメンバーによる『メアリー・エイケンヘッドの生涯と仕事—修道院アイルランド・姉妹慈善会の創立者—』（“The Life and Work of Mary Aikenhead—Foundress of the Congregation of Irish Sisters of Charity — “1925 年）[以下、『M. エイケンヘッド個人史』と略記]を中心に据えて、彼女の思考や行動を縦軸で追いつつ、他方で当時の 18 世紀後半から 19 世半ばまでの、彼女を包む時代状況を浮き彫りにしてみたいのである。

さて、アイルランド共和国 (the Republic of Ireland) は、連合王国 (UK: the United Kingdom) の西、アイルランド島にある。なお、UK はグレート・ブリテン (Great Britain) と北アイルランドとの連合体である。北アイルランドについて、少し注釈したい。北アイルランドは 1920 年のアイルランド施政法によって、南アイルランドから分離された。さらに 1922 年に英国の一部に留まるのである。当時、北アイルランドの人口 160 万人のうち 3 分の 2 の 100 万人がプロテスタント、3 分の 1 がカトリックであった。<sup>(6)</sup>

他方、南アイルランドは、1949 年に長い植民地独立運動の末に、当時のイギリス連邦から独立し、アイルランド共和国を樹立した。そのアイルランドと英国との政治的抗争について顧みようとする時、宗教あるいは信仰に関わる相互の境界が意識されるのである。まず、宗教的な対立状況の背景を知らねばならない。

とりあえず、両国ともにキリスト教を信奉する人は圧倒的多数、という点は了解できよう。その上で、アイルランドでは住民の約 90% が「アイリッシュ・カトリック」の信者であり、他方英国ではキリスト教者の約半数が「英国国教会 (Anglican Church)」の信徒で

ある。そのことは、その宗教的相違そのものではなく、政治的・経済的制度の創設が宗教的差異を常に意識させることによって、厳しい対立の継続が促されてきたことに留意したい。

まず、M・エイケンヘッドとともに病院建設に尽力した「慈善姉妹会 (the Sisters of Charity)」を巡るアイリッシュ・カトリックについて、とくに修道院についての概観を得ることが必要と思われる。

だが、教会と修道院、この区別は難しい。とりあえず、第一義的に言えば以下のように表現できるであろう。

教会とは神によって呼び集められた礼拝するものの集まりである。<sup>(7)</sup>

つまり、教会では信徒と司祭、あるいは司教とが主たる関係であり、修道院は神との交わりの中での修行の場である。その修道院の役割について、以下に引用したい。

受礼者の生活にとって基本的なことは、孤独のうちに、そして共同の礼拝典礼において、絶えず聖書を読み、黙想することである。<sup>(8)</sup>

かなり単純化して言えば、キリスト教を信仰する人の集まりが教会であり、聖職者の修行の集まりは修道院である、と思えるのである。そのことは、西欧中世のことであり、古典古代の時代には修道院、および独立した教会が全く欠如していたのである。<sup>(9)</sup>

ことは、教会と修道院との区別だけの問題ではない。アイルランドにおいては、修道院教会という表現が望ましい、という見解があるからである。その点について確認したい。盛節子は、初期中世アイルランド教会の特性に関して、極め重要な定義をしている。つまり、「修道院教会」がアイルランドでのキリスト教施設の特質であると言うのである。

全体として7世紀中葉から8世紀迄に— (中略) —教会と修道院の二重の組織と機能を持つ「修道院教会」として制度的・経済的基盤を確立し、聖職者・修道士・一般俗信徒を含んだ修道院領の形態に拡大していく。<sup>(10)</sup>

アイルランドでは、修道院長が教会の司祭を兼ねるのは、そうした歴史的過程に負う。修道院教会というアイルランド地域で固有の宗教的特性は、この後、アイルランドの歩みの節々において信仰の原点として生き続けるのである。そのアイルランドの原点、そのことはアイルランド人の帰るべき故郷ともなるのであるが、その点にもう少しこだわってみたい。時代は一飛びに、紀元5世紀に遡る。東アジアにおいて、シナの国ではいまだ統一国家を得ない争乱状態にあり、朝鮮半島においても百済・高句麗・新羅の抗争が続き、日本列島では唯一「倭」のみが外の世界に認められていた。

アイルランド島に、衝撃的な、半永久的な痕跡を与える人物が渡来する。「パトリック (Patrick) : 390 - 460 年」、という名称で伝えられている「聖人 (saint)」である。彼は「ブリタニア」、現在のイングランド島に生まれ、侵略者にさらわれてアイルランド島で奴隷になり、6年後に逃亡しヨーロッパ大陸 (ガリア) に渡る。「夢のなかでアイルランド島に

戻れ」という召命を受けて、彼は宣教師・司教としてアイルランド島に戻るのである。<sup>(11)</sup>

セント・パトリックは、アイリッシュ・カトリックの象徴である。ニューヨークの「セント・パトリック教会」は移住したアイルランド人が建設したものである。アイルランドのダブリンとコークの町には、「セント・パトリック病院」が建設されている。さて、そのパトリックのことであるが、キリスト教布教における彼の重要な功績の一つは教会の建設にあった。また、セント・パトリックス・デーという祭りには、「シャムロック」の葉を胸につけるという。その葉の様態は日本の「三つ葉（クローバー）」に近い。そのいわれは、パトリックが布教にあたって、「シャムロック」を示しながら、キリスト教の「三位一体（trinity）」、つまり父（神）と子（キリスト）、そして聖霊が一体的であることを説明した、<sup>(12)</sup> というのである。

セント・パトリックはキリスト教をアイルランド島に持ち込んだ。彼はその布教にあたって、アイルランド人のケルト文化を尊重し、その文化にキリスト教を接ぎ木した。したがって、そのカトリック教はその始原たるローマ・カトリックとも異質な性格を内蔵してきたのである。それを「アイリッシュ・カトリック」と呼ぶのはこうした理由からである。

## 2. セント・ヴィンセント病院の建設

キリスト教の布教の過程では、修道院と教会とが区別されながら連携されて継承されてきた。アイルランドでは、「修道院教会」として運営されてきたことが特徴的である。その特徴にもかかわらず、小論ではアイルランドであっても、以下「修道院」の名称で記述することにしたい。

ところで、日本では理解不能なことがヨーロッパにおいてはごく当然と思われることがある。たとえば、修道院が病院や介護施設を創立しその経営者である、ということについてである。つまり、修道院の動向がそれぞれの地域における生活多様性を刻印するのである。

### アイルランド修道院

古代ローマの文化を継承しつつ、やがて始まるキリスト教文化をみずからの胎内に宿す、かのヨーロッパ的中世を準備するのが7～8世紀のガリア地区（現在のフランス中・北部）での修道院建設である。<sup>(13)</sup> その修道院の建立者こそが、アイルランドの「コロンバヌス修道院」出自の「アイルランド系修道士」であった。

「コロンバヌス」の規律のもとで修業した司教や修道院長を統治者としてことを喜ばないところがあるか。<sup>(14)</sup>

修道院の生活を規律するのは「修道士規則」である。「コロンバヌス」修道院規則の一節を掲げる。

美德の本義は善を促すことであり、この善によって成り立つからである。日々祈り、日々労働し、日々読書しなければならないと同様に、日々節食しなければならないのはこのためである。<sup>(15)</sup>

かくして、修道院は信徒の範たるべき生活を率先すべき場として、それは組織の命令ではなく、個々の修道士の倫理によって果たされるべきことであり、「魂の救済」のためには人間の動物的欲求の発現をみずからによって抑制することである。性欲や所有欲などの根源的欲求、あるいは飲食の欲求では「素食」が求められ、1日1食を夕刻に摂り、酔うような飲料は避けるべきことである。

6～7世紀のアイルランド島は、祈りと学び（ギリシャ語・ヘブル語・ラテン語）、そして労働の聖地であったという。各地から、かの「学者の島」を目指して修道の人が集まる。その修道士の規模は、「バンゴール修道院 4,000 人」「クロンマクズ修道院 3,000 人」「クロナード修道院 1,000 人」などである。この島からドーバー海峡を越えてガリア地方へ、さらに異教の地へとキリスト教伝道に旅立つためであった。<sup>(16)</sup>

なお、530 年頃に完成したと言われる「聖ベネディクト会則」について一言したい。この「会則」は修道院制の普及に貢献するとともに、その普及の過程において西欧的文化の形成に大いに与かったのである。それに盛り込まれた事項のなかで、特に以下の点が特筆される。

- ① 修道士の労働や定住の義務
- ② 修道院の生産・販売による自給自足
- ③ 修道院と近隣の農民との協力関係

大陸での修道院活動は、やがてアイルランド型からアングロサクソン人を中心とした「聖ベネディクト型」へと転回する。修道院は修道士だけのものではない。「学び」は研究の蓄積を生み、図書館として整備される。労働によって、麦などの農作物における耕作の技術・方法を進化させ、その蓄積が農民に伝えられ生産力の向上に貢献する。また、パン・ワイン・乳製品などの開発・普及は、これまた修道院労働の貢献である。

西欧型中世社会の開始とされるのが、カール大帝の統治（在位 768 – 814 年）である。カール大帝は、「ヘルスタル勅令」（779 年）において、「正規の修道士の在住する修道院については、[聖ベネディクト]会則に従って生活すべし」<sup>(17)</sup>としたのである。修道院はこうしてカール大帝の保護に置かれるとともに、彼は地上の王であるとともに天上の神の世界にも君臨しようとするのである。こうして、中世の町の中心に「広場」・「教会」、そして「市庁舎」が並び建つ、その文化的風景が西欧の共通世界として浸透していく。

## セント・ビンセント病院の創立

ダブリンのセント・ビンセント病院、後には「ホスピス」の先駆となる病院であるが 1834 年に創設される。その点はすでに触れたことである。それに先立ち、修道院が建設される。つまり、修道院姉妹慈善会（the Sisters of Charity）の設立である。この当時のアイルランドの状況が、『M. エイケンヘッドの個人史』に以下のように記録されている。

1834 年、アイルランドのカトリックは、法的には解放されていたけれども、なおおらずとして、熱意に乏しく、そして落ち込んでいた。<sup>(18)</sup>

上記の表現に「法的には解放」と語られているが、それは 1929 年の「カトリック解放令」を指している。だが、依然として差別は持続していた。

18世紀初頭のアイルランドでカトリックは全人口の4分の3を占めながら、彼らの所有する土地は全国面積のわずか14%にすぎなかった。<sup>(19)</sup>

そこに、カトリックとプロテスタントとの対立・抗争が想起されねばならない。もちろん断片的な時に向き合うことなのだが、それでもアイリッシュ・カトリックとアングリカン・チャーチとの激しい当時の抗争に目を転じなければならない。とくに注目すべきことは、イングランド議会派ピューリタンの指導者クロムウェルによって、アイルランド司祭と教会が無差別な破壊によって葬り去られたこと、についてである。

以下、それに関わる略年史である。

1553 年	エリザベス一世、英国国教会を確立
1592 年	トリニティ・カレッジ（ダブリン）創設
1649 年	クロムウェル、司令長官としてダブリンに入城
1650 年	クロムウェル軍のアイルランド征服完了
1695 年	異教徒刑罰法によるカトリック弾圧始まる
1776 年	アメリカ 13 州独立宣言
1789 年	フランス革命始まる
1800 年	英・アイ連合法制定、アイルランドはイギリスに合併される
1808 年	D. オコンネル政界入り
1823 年	D. オコンネル、カトリック・アソシエーションの創設
1829 年	カトリック解放令施行
1840 年	D. オコンネル、英・アイ連合解消協会設立
1845 年	ジャガイモ病害始まる
1846 年	大飢饉全国に拡大 穀物法廃止 自由貿易開始
1848 年	アイルランド連盟創設 D. オコンネル死去
1858 年	秘密結社フェニアン団がニューヨークで結社 アイルランド共和兄弟団（IRB）がダブリンで創設

(20)

1649 年、クロムウェルはアイルランド人の反イングランドへの対抗として、「三面作戦」によって、つまり①全武装勢力の完全な解体、②反乱に関係したすべての司祭と地主の除去、③アイルランド全人口のプロテスタントへの改宗<sup>(21)</sup>、によって、アイルランドをイングランド化しようとするのであった。また、クロムウェルの軍隊は、それぞれの兵士が自己の信仰として、自己の内に「バイブル」を抱き、強烈な連帯意識と戦闘性を兼ね備え、それだけに外に向けては残虐性を秘めるものとなった。

司祭たちは迫害され、カトリック教会の全組織が数年のうちに徹底的に破壊され尽くした。カトリック教徒の資産は没収され、反乱に加担しなかった者もシャノン川以西に追いやられた。<sup>(22)</sup>

アイリッシュ・カトリックは敗北した。だが、その「カトリック」はなお堅持されたままである。その後、1691年に「リマリック条約」の法律が公布され、権利としての土地所有が禁止され、アイルランドには神とジャガイモのみでの生活が強えられる時代が続くのである。1800年代はジャガイモ飢饉、飢餓で多くのアイルランド人が命を落とす。

アイルランドでの初めてのカトリック系の病院開設は、そうした時節の点でも敷地の点でも、「格調高き大胆さ」の行為として十分に特徴づけられたのである。<sup>(23)</sup>



写真3：現在のセント・ヴィンセント大学病院内（撮影：豊田謙二）

その建設は容易ではなかった。建設の推進母体は「The Sisters of Charity」である。膨大な資金の手当てから、過酷な政治・社会状況のなかでの推進力はひたすら「愛」であったろう。

セント・ヴィンセント病院の創設は、その病院は M. マザー・エイケンヘッドの心の子どもとでも言えるのであるが、多くの月日に痛ましい苦悶が費やされたのである。一時は、一歩ごとに彼女の失望と難事は降りかかったのである。<sup>(24)</sup>

### 3. M. エイケンヘッドと D. オコンネル

創設時のセント・ヴィンセント病院は、1935年度に病床40、1936年度に男性患者用の病床が追加された。さらに、1936年に「セントパトリック」という病棟が40病床を備えて増設されたのである。<sup>(25)</sup>

神が彼女の病院を維持するために彼女に送られた多くの友人のなかに、ダニエル・オコンネルがいた。彼はいつもセント・ヴィンセント病院への深い関心を抱きながら、M. エイケンヘッドのための支援として設立資金額の確保のために奔走したはずである。

下記の記録は、1940年にマザー・エイケンヘッドを訪ねた時の D. オコンネルの発言である。D・オコンネルは、「この病院には80のベッドがあり」と継いで、次のように言う。

それは市の病気の貧しい人のためなのですね。それらのベッドは、それが何であれ、優れた女性たちによって、何らの支出なしに支援され、供されるのです。その不幸な患者

に彼女たちが提供しているのは、患者の不幸への単なる同情の結果というだけでなく、彼女たち自身の高潔な感情の帰結なのです。—以下省略—<sup>(26)</sup>

## タラの丘

D. オコンネルは、1843 年、対イングランドに向けて併合撤回運動を組織する。D. オコンネルの偉大さは、非暴力的闘争を指揮しつつ、その大衆動員力の政治的魅力に証明されていた。この年、彼の呼びかけに 75 万とも 80 万人といわれる多くの人々がアイルランドの各地から終結した。当時のアイルランド人の 10 人に一人、つまり全人口の 10% が駆け付けたというのである。その舞台がその動員力に力を与えた。その舞台とは、「タラの丘」である。<sup>(27)</sup>

D. オコンネルは、アイリッシュ・カトリックであり、M. エイケンヘッドもまた同じ信仰を持っていた。この「タラの丘」は、5 世紀にセント・パトリックがキリスト教普及の出発点とした聖なる場であり、アイリッシュ・カトリックの聖地とされてきた場でもある。「聖なる」という用語には、二つの意味が込められる。一つは、ローマキリスト教の布教以前の、ケルト人の信ずる神々であり、いま一つはそのケルトの神々と融合したアイリッシュ・カトリックの神として、なのである。そのことが、ローマ・カトリックとを区別する指標であり、同時にケルト文化を今日まで継承しえた理由であるかもしれない。

「タラの丘」に関しては、もう一つ、アイルランド人の移住先の一つである新大陸アメリカでの移住者のなかにも、「聖地タラ」を発見できる。ひとつの文章を引用したい。

物語の結びで、夫のレット・バトラーから別れを宣告され、出口の見えない苦境に陥ったとき、スカーレットが頼りにしたのはタラ農園だった。タラ農園へ戻って行けば何とかなる、明日、タラに戻って考えよう、と。<sup>(28)</sup>

この文章は、小説『風と共に去りぬ』訳文のなかの、訳者荒このみの、訳者としてはかなり長文の「解説」から引いたものである。「風と共に去りぬ」はアメリカ南部戦争を舞台として、筆者 M. ミッチェルが実体験に基づきながら、アメリカ史における時代の転換期を主人公スカーレットに自分史を重ねながら描いたものである。同時代人の熱い共感を得て、世界的なベストセラー作品として、またロングセラーとして知られている。

さて、筆者 M. ミッチェルの父ジェラルドは、アイルランド人の移住者である。ジェラルドは、土地所有への渴望が強烈であったという。ジェラルドは、「自分の家、自分の農園、自分の馬、自分の奴隷を持ちたいとの野望」<sup>(29)</sup>に燃え、その「野望」を南部アトランタにおいて実現し、小説『風とともに去りぬ』において作者はそれを「タラ農園」と命名したのである。M. ミッチェルは、主人公のスカーレットに父ジェラルドの「野望」を仮託する。やがて、その「野望」が南部連合の敗北で崩壊するのである。

- 1860年 リンカン、大統領選挙に当選 (11月)  
サウスカロライナ州、連邦脱退 (12月)
- 1861年 その他の南部諸州10州、連邦脱退  
2月までに脱退した7州で「南部連合」の結成 (2月)  
「南部連合」軍、サムター要塞を砲撃：南北戦争勃発 (4月)  
リンカン大統領、南部沿岸封鎖を宣言 (4月)  
南部連合、首府をヴァージニア州リッチモンドに移す (6月)
- 1863年 奴隷解放宣言の発布 (1月)  
リンカン大統領、ゲティスバーグ国立墓地において、「人民の人民による人民のための政治」の演説 (11月)
- 1864年 南軍のジョン・B・フッド将軍、アトランタ撤退を決断、ジェイムズ・カルフーン市長、北軍に降伏。市民に避難勧告、アトランタの焼き払いを命令。病院と教会を残してアトランタは焦土と化す (9月)  
リンカン、大統領選挙に再選 (11月)
- 1865年 南部連合の首府リッチモンド陥落 (4月)
- 1872年 特赦法 (旧南部連合指導者の追放解除 (5月))
- 1877年 連邦軍、南部より引き上げる、南部の白人が復権、「アメリカの黒人」の差別を合法化する州法 (4月)
- 1964年 公民権法成立、「アメリカの黒人」はアメリカの市民に
- 1965年 投票権法の成立

アメリカ黒人とアイルランド人、ヨーロッパではアイルランドの人が差別・偏見の対象とされたのである。だが、イングランドの植民地として虐げられた「アイルランド人」は、様々な戦いのなかを通じて、自己のアイデンティティを守り続けている。

#### 4. エイケンヘッドとホスピス

ロンドンで買い求めた1996年発行の「世界地図」を眺める。ほぼ中央に「UNITED KINGDOM」(連合王国)、その真西に「IRELAND (アイルランド)」が座り、その首都Dublin (ダブリン) に面したアイリッシュ海の対岸にLiverpool (リヴァプール) が控えている。ここで少し、港町リヴァプールについて調べてみたい。この町に設置されている海事・奴隷博物館 (Maritime & Slavery Museum) に関することである。

#### リヴァプール海事・奴隷博物館

この「博物館」はマーセイ河 (River Mersey) に沿って、ショッピングセンターやレストラン、および1990年にオープンした「The Beatles Story」などと共に、観光ガイドブックの一端をにぎやかにしている。だが、この博物館内には尋常でない、厳しい空気が張り付いている。それは「奴隷貿易」をめぐるこの地の自責の、あるいは今日でもなお現存する「奴隷」状態 (例えばインドでの) などがここで告発されてもいるからである。このリヴァプールを巡る「奴隷貿易」、その「奴隷貿易禁止法」が公布されたのは、1808年のことである。

この年イングランドで奴隷貿易の禁止、1819年フランスが奴隷貿易の禁止、次いで1840年に、ロンドンにおいて世界反奴隷制大会が開催される。<sup>(30)</sup>

奴隷貿易の黄金時代、この貿易に従事したヨーロッパの船のうち、4割以上がリヴァプールの船主であった。この町から出港した奴隷船は、ブリストル、ロンドンを抑えて(のべ)5300隻を超え、この町に歴大な富をもたらした。<sup>(31)</sup>

この町はまた新大陸アメリカに向かう移民の出港地であり、アイルランドの港からの移民の多い町でもある。リヴァプールの人口の3分の2がアイルランド人の子孫であるとも言われている。そのリヴァプール市参事会が、1999年12月9日大西洋奴隷貿易のなかでこの町が果たした役割に関して、正式謝罪する決議を満場一致で採択したという。以下、当時の市長ジョセフ・デブアニの発言である。

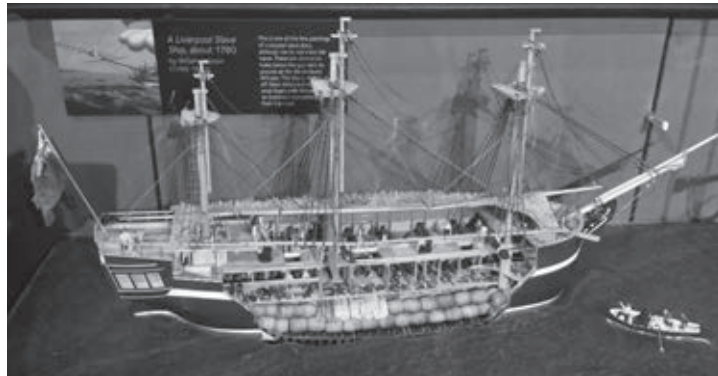


写真4：奴隷船（奴隷博物館所蔵、撮影：豊田謙二）

リヴァプールが奴隷貿易で果たした過去がほんとうに許されるとすれば、それは和解のプロセスを通じてである。そのために重要なことは、行動を起こすこと。一時のごまかしではなく、永遠に続くような和解がもたらされるとすれば、その唯一の方法は、勇気をもって歴史の痛みと向き合い、そして変えることだ、と………<sup>(32)</sup>

リヴァプール市の試みは、その犯した行為への反省という点において、そして率直な反省姿勢は深く胸に染みる。と同時に、「奴隷」は過去のことではなく、今日においても消滅していないことを、インドの「デリー・自由・ネットワーク」が伝えている。インドではなお、「様々な形態での現代的奴隷として搾取」されていることについて。<sup>(33)</sup>

## アイルランドとイングランド

少し、M・エイケンヘッドの時代の様相を、「奴隷制度」の帰趨の中において浮かび上がらせたいと思ったのである。そこで、「奴隷」という人間の括り方について、改めて掲げてみたい。

「奴隷という言葉は一般に外国生まれの身分の低い人間を指すために普通に使われていたし、アイルランド人にもロシア人にも適用されていた」、とオスカー・ハンドリンは述べている。<sup>(34)</sup>

上掲は、孫引きながら当時の「奴隷」の意味合いを伝えていて「奴隷」概念を豊かにしてくれる。と同時に、アイルランド人がなぜ当時「奴隷」と同一視されていたのか、その問題性に迫らねばならない。まず、その思索への通路として、当時のイングランドの政治的・思想的状況を再現してみなければならない。

そこで、「当時」という時期をメアリー・エイケンヘッドの存命期間、つまり1787年から1858年の期間に焦点を当てたい。

1785年、カートライトが力織機の発明。農地が羊の放牧場に転換され、羊毛を原料にするウール製品の工業化が開始される。この時代は、かの世界最初のイングランドの「産業革命」、つまり手工業から機械制工業への転換期の中にあった。転換は、人力から石炭などの動力へ、手作業から機械へ、それを支えたのがプロテスタントの新しい「精神」であった。農地を耕作してその余剰を町の市場で販売する。あるいは安く買って高く売る、それらは伝統的な商いであり、新しい「精神」は組織的な工業体制を担い、ひたすらプロテスタントの神の「道具」として禁欲的生活に殉ずることにある。だから、その新しい「精神」は伝統的なことに挑戦的でさえあったのである。

キリスト教を精神とする中世世界の形成が、ヨーロッパ文化の古代ローマとの決別であるとするれば、かの新しい「精神」は「time is money」を基調とする、あらゆることを限りなく「もの」化する活動なのである。それは確かに、新しいヨーロッパの「精神」の登場ではある。その動向を照らす当時発刊された著名な二つの書籍を紹介したい。

### Samuel Smiles, "Selfhelp" ロンドン、1859年

訳者中村正直(1832 - 1891年)、江戸麻布に生を受け、数え3歳で句読を習い習得したというから、いわゆる「神童」であった。昌平黌で儒学者として教授生活を過ごすうちに「黒船」の時代に突入する。彼は1860年ごろから英学に志し、江戸幕府の募集した英国留学に応募するのである。1866年(慶応2年)12月、14名の留学生とともに船の人になったのだが、1868年に明治の革命が勃発する。中村は荷物をまとめ、1年半のヨーロッパ滞在に別れを告げ、帰国する。その際、中村が帰国時に友人フリーランドから贈られたのが1867年版の“self help”である。時に、ヨーロッパの蓄積された文化をごっそり翻訳して欧州化を目指す、その国策の先頭に中村がいた。<sup>(35)</sup>

### J.S.Mill, "On Liberty" ロンドン、1859年

この書も中村正直の訳として、『自由之理』の表題の基、明治5年から10年にかけて東京で出版されたようである。「Liberty」が「自由」と訳された。「自由」とは「わがまま勝手」の意味の用例が多いという。福澤諭吉も批判、当の中村の訳に戸惑う、だがその訳語が定着してきた。<sup>(36)</sup>

今日、ミルの「自由論」は倫理学の領域において、極めて重要な知見のひとつである。その「自由論」には、何をしても許されるという際どい領域を含む。と同時に、他者の介入を排除する、という「自由主義」の強固さがある。とくに「自己決定」に関わる倫理においてその観念が援用される。

自由には、悪の許容という要素がある。他人に危害や迷惑をかけないなら何をしてもいいというのが、自由主義の中心にある考え方である。ここには、積極的に何をすべきかと言うことに、一言も触れまいとする覚悟がある。<sup>(37)</sup>

上記の二冊は、M. エイケンヘッドの死去の翌年刊行されたものであり、今日では古典の意義を持つ書である。鎖国から開国へ、伝統文化のすべてをひっくり返してヨーロッパ文化を導入する勢いにあった。

アイルランドとイングランド、その厳しい対決は休まることのない、そうした時代にあった。

### 奴隷であったセント・パトリック

セント・パトリックは、宣教師・司教として、432年にアイルランドに戻ったこと、すでに述べた。彼はアイルランドで「奴隷」とされた地に「召命」を受けて戻り、キリスト教の布教者として尽くしたのである。すでにアイルランドの地にもローマからのキリスト教が伝えられていたのであるが、既述のように、彼の貢献はケルト文化の伝統の上にキリスト教を接木するとともに、キリスト教信徒を組織した点にあると思われる。つまり、アイルランド特有の、「修道院教会」の礎石としてなのである。

そのセント・パトリックに関わる逸話がある。紹介したい。

ミーズのタラで、彼はイースターの前夜に、有力な王、ラオオレイに大胆に立ち向かった。スレインの丘の上で復活祭の火の光を輝かせ、ドルーイド僧を黙らせて、自らについて力ある人間という尊を獲得したのである。<sup>(38)</sup>

D. オコンネル、対イングランドへの抵抗に際して「集会」を開催したのは、「タラの丘」であった。M. エイケンヘッドはカトリック修道院の再建をもとに、病院建設の構想を早い時期に D. オコンネルに打ち明け、支援を約束させたであろう。M. エイケンヘッドの構想は個人的な願望を超えて、アイリッシュ・カトリックにおける共通の神の啓示であった、と思えるからである。



写真5：ダブリン市内の住宅街（撮影：豊田謙二）

彼女は個人の経験からも学んでいたことであるが、かなり多くの人が病気で、あるいは貧しさゆえに亡くなり、あるいは慢性的な病気の状況に陥り、厳しい貧困と蔑まれた状態にあった。そのうえ、彼女は、公的病院において多くの貧しいカトリック系の人たちが、臨終の秘跡 (sacraments) も無しに死んでいくことを深い悲しみのなかで熟知していたのである。<sup>(39)</sup>

彼女の最も印象的な特性の一つは、断固とした強い意思にあった。<sup>(40)</sup> メアリー・エイケンヘッドの死後、「ホスピス」の活動は世界的規模で拡大していく。その一端を示せば、以下の通りである。

1879年 Our Lady's Hospice for Dying (in Dublin)

1890年 Scared Heart Hospice (in Sydney)

1905年 St. Joseph's Hospice (in London)

<sup>(41)</sup>

### オーストラリアへの入植者

イングランドは1786年に、「オーストラリア大陸東岸および近接した島々」からなるニュー＝サウス＝ウェールズ植民地成立を宣言したのである。<sup>(42)</sup> M・エイケンヘッド、その翌年の87年に生を受ける。

このオーストラリア、ここには先住民族としてアボリジニーズがいた。彼らは、狩猟採集によって生計を立てるために土地所有への観念に乏しく、しかも移動する生活範囲は50名以下の小集団であり、白人の侵入に対抗する手立てを持ち合わせていなかったのである。<sup>(43)</sup> 1787年5月13日、流刑囚780人、海兵隊・スタッフおよびその家族など約1200名を載せた、その第一次流刑船団がボーツマス港に入港した。「流刑植民地」建設の開始である。3年後には、アイルランドからの囚人船も到着した。1930年頃の島の人口の約7割が囚人によって占められたという。<sup>(44)</sup>

これ以降、アイルランドでイングランドへの抵抗活動した、いわば「反国家」活動の人もここオーストラリアに移送されるのである。

流刑囚は基本的にイギリスとアイルランドから選ばれたので、移民の流入はイギリス文化の継続的な輸入と、再生産を生み出した。イングランド系、アイルランド系、スコットランド系などの移民とその子孫が人口の大部分を占め、イギリスはオーストラリアの

人々によってホーム（home：故郷）と呼ばれ続けた。<sup>(45)</sup>

オーストラリア（ニューサウスウェールズ）への流刑が停止されるのは、1940年、その後53年にタスマニアへの流刑も廃止される。<sup>(46)</sup> これ以降は自由な移民に移るのである。こうした歴史的状況のなかで、アイルランドとオーストラリアとが、イングランドの植民地として互いに結びつけられている、という発見を得る。

そして、このオーストラリアのシドニーに1884年、世界で2番目のホスピスが建設されるのである。その建設者はかの the Sisters of Charity であった。

サン・ヴァンサン・ド・ポール修道会の Sisters of Charity は、死期を迎えた人々への心優しい関心を寄せ、シドニーにホスピスを創設した。だが、その関心は健康な人々に対しては、控えめである。つまり、ホスピスには、死につつある人々が収容され、生きている人々のためには用いられない。<sup>(47)</sup>

### インドのマザー・テレサ

現在のユーゴスラビアのスコピエの町に、1910年8月28日、アグネス・ゴンジャが生を受けた。後の、「マザー・テレサ」である。彼女は幼い日々のなかで、セント・フランシスコのように修道院生活にあこがれたようである。彼女がイングランドの植民地インドに向かったのは、1928年秋、彼女が18歳の時であった。彼女のそうした熱意を支えたのは、アイルランドの「ロレット修道会」であった。アグネスは、アイルランドのかの修道会を訪ねていたのである。

分かりました。でも、あなたがどこでどんな生活を送るかをお決めになるのは、神さまで。あなたをインドのダージリンにある、わたしたちの修練院へ送りましょう。そこで、二年間生活してごらん下さい。<sup>(48)</sup>

彼女はダージリンのロレット修道院で祈りに明け暮れる日々であった、という。彼女はこの地において1931年「テレサ」という修道名を受けるのである。シスター・テレサの誕生である。マザー・テレサとシスターたちは、カルカッタに「死を待つ人の家」、ベンガル語で「清い心の家（ニルマル・ヒルダイ）」を設けた。路上で倒れている人がここに運び込まれた。まず体を洗い、姓名、年齢、そして宗教が尋ねられた。

マザー・テレサの目的は、人々をカトリックに改宗させることではなかった。そうではなく、ヒンズー教徒をよりよいヒンズー教徒として、カトリック教徒をよりよいカトリック教徒として、イスラム教徒をよりよいイスラム教徒として、死を迎えさせることにあったのだった。<sup>(49)</sup>

カトリック教徒は死を迎えて、臨終の秘跡を受けることができるのである。「あなたも、望まれ生まれてきたのですよ。かけがえのない、大切な人なのですよ」<sup>(50)</sup>、そのメッセージ

を死に逝く人の世話をしつつ伝えること、そこに大切な修道女（シスター）たちの修道と祈りの召命があるのであろう。

その、マザー・テレサの修道の出発点は、アイルランドの「ロレット修道院」にあった。さて、そのアイルランドの M. メアリー・エイケンヘッドに立ち返りたい。

彼女の意図したことについて、かのアイルランドの「奴隷時代」においてアイリッシュの修道院、次いで病院へと築きあげていく道のりに、「ホスピス」という道標があったかに思える。

### 結びに

アイルランドへの旅は謎を探ることにあったのですが、顧みれば、思いもかけず苦い自己反省をもたらすことになったのである。

なぜ、アイルランドにおいて「ホスピス」が始まったのか、という問いは「ホスピス」とは何か、と問うことでもあった。でもとりあえずは、なぜアイルランドであるのかについては、次のような回答が可能であろう。煉獄の日常世界であっての一筋の光、それが「ホスピス」であった、と。プロテスタントの一教派である英国国教会による植民地アイルランドへの、つまりアイリッシュ・カトリックへの政治的・経済的、そして「奴隷的な」な生活への強圧、その極限的生活のなかで望まれたのが人間的な死への旅であった。

その象徴的な光の糸が、「タラの丘」であるように思える。

また、M. エイケンヘッドの願った「ホスピス」は、今日の近代的な「ホスピス」とは根本的に異なるように思える。今日では、「ホスピス」では死期の迫った患者に対して、延命の治療ではなく、個人の意思を尊重しつつ痛みのコントロールや孤独の悲しみを避けるための、たとえばホスピスボランティアの養成であり、また大切な人を失った人への「グリーフ・ケア」の実践などが特徴として思い浮かぶのである。だが、アイルランドでの「ホスピス」は、治療を受けられず、貧困と孤独に虐げられている人への援助であり、病院に搬送して、人間としての暖かい手当（看護）が無料で提供できることにある。

アイルランドでなぜ「ホスピス」なのかに関しては、かなり執拗に、当時置かれていたアイルランドの状況を追体験したつもりである。また、「ホスピス」とは、という設問に関しては、修道院やマザー・テレサの実践をアイルランドに関わらせながら、示そうとしたつもりである。

最後に自省のことである。自省とは「世界史」を学んだはずなのに大切なこと、つまり、被支配と支配、奴隷と自由人、その対立が第二次大戦期においてなお継続していたことについて、鳥瞰できていなかった点である。アイルランド共和国の成立は1949年であった。

M. エイケンヘッドの個人史を追いかけていこうとすると、かの時代史に踏み込むことになる。その時代史には、彼女個々人の人との関わりの社会運動とともに、国と国との国際的な政治関係が絡んでいる。M. エイケンヘッドは「強い意思」の人であったという。それでも、彼女の意思はその時代史に絡め取られ、茫漠として漂っているようでもある。

彼女の意図したことについて、同時代の司教の遺したメッセージがあるが、かの「奴隷時代」において修道院から病院へと徐々に築きあげていく彼女の道標であったかに思える。以下に引用して結びとしたい。

彼女の修道会は、慈善（charity）に関わるあらゆるスピリットを引き継いでいる。彼女の慈善姉妹会（The Sisters of Charity）の使命は、ゆりかごから墓場まで、そしてテンプル・スツリート・病院にいる病気の子どもたちから死に逝く人のためのホスピス、ハロルド・クロスに至るまで、そのスピリットを拓けることなのである。<sup>(51)</sup> (ibid.435)

## 注

- (1) 岡村明彦「ホスピスへの道」（『岡村昭彦集』筑摩書房、1987年、所収）
- (2) 外池良三編『世界の酒日本の酒ものしり事典』東京堂出版、2005年2－3頁。
- (3) St. Vincent's University Hospital "Patient - Information -" 2014年 p.4
- (4) 同上
- (5) 岡村明彦、前掲書 104 頁
- (6) 波多野裕造『物語アイルランドの歴史』中央公論社、1994年、251 頁
- (7) 編『キリスト教事典』教文館、2005年、148 頁
- (8) 前掲書、306 頁
- (9) マックス・ヴェーバー『都市の類型学』 P.285
- (10) 盛節子「初期中世アイルランド教会制度の再考（2）」 00年、44 頁
- (11) 『聖人事典』ドナルド・アットウォーター他編、山岡健訳、[株]三交社、1998年 P.281
- (12) 波多野裕造『物語 アイルランドの歴史』、中央公論社、1994年、41 頁
- (13) 今野國雄『修道院』岩波書店、1981年、68 頁
- (14) J.T. マクニール『ケルト教会』、前掲書 70 頁からの孫引き
- (15) 『修道院』前掲書、65 頁
- (16) 同上、54 頁
- (17) 同上、90 頁
- (18) 同上、144 頁
- (19) 波多野裕三、前掲書 133 頁
- (20) 同上、「アイルランドの歴史・略年表」（269－279 頁）を参照して作成
- (21) 同上、121－122 頁
- (22) 同上、122 頁
- (23) A Member of The Congregation "The Life and Work of Mary Aikenhead"  
University Press of the Pacific Honolulu, Hawaii, Reprinted from the 1925 edition, p.147
- (24) ibid.p.147
- (25) 岡村昭彦、前掲書、303 頁参照
- (26) ibid.p.162、なお、岡村『岡村昭彦集』前掲書、303 頁にオコンネルについての記述がある
- (27) 高橋哲雄『アイルランド歴史紀行』筑摩書房、1991年、221 頁
- (28) 荒このみ「タラ農園とチェロキーの＜涙の道＞」（マーガレット・ミッチェル『風と共に去りぬ』の訳者解説、岩波書店、2015年、441 頁
- (29) 荒このみ、前掲書、439 頁、以下の年表は同著「関連略年表」を参照して作成
- (30) 本田創造『アメリカ黒人の歴史』岩波書店、1991年、18 頁以下を参照

- (31) 井野瀬久美恵『大英帝国という経験』講談社、2007年、172 - 173 頁
- (32) 同上
- (33) Dalit Freedom Network UK” Broken Lives” Stafford ST169QP,2015
- (34) 本田創造『アメリカ黒人の歴史』岩波書店、1991年、38 頁
- (35) 平川祐弘『天ハ自ラ助クルモノヲタスク』名古屋大学出版会、2006年、2 - 32 頁
- (36) 柳父章『翻訳語成立事情』岩波、1982年、175 - 191 頁
- (37) 加藤尚武『現代倫理学入門』講談社、1997年、187 頁
- (38) ドナルド・アットウォーター他『聖人事典』前掲書
- (39) ibid.“The Life and work of Mary Aikenhead”p.431 - 463, 加藤恒夫「イギリスにおける終末期ケアの歴史と現状—日本への教訓—」『海外社会保障研究』2009年 No.168、を参照)
- (40) ibid,p.144
- (41) ibid.p.431 - 463, 加藤恒夫「イギリスにおける終末期ケアの歴史と現状—日本への教訓—」『海外社会保障研究』2009年 No.168、を参照)
- (42) 北大路弘信・百合子『オセアニア現代史』山川出版社、1982年、21 頁
- (43) 前掲書、10 - 11 頁、1787年5月13日、流刑囚780人
- (44) 井野瀬久美恵、前掲書、116 頁
- (45) 藤川達男編『オーストラリアの歴史』有斐閣、2004年、72 頁
- (46) 藤川達男編、前掲書、79 頁
- (47) 岡村、330 頁
- (48) 柳谷圭子『マザー・テレサ』ドン・ボスコ社、1990年、9 頁
- (49) 柳谷圭子『マザー・テレサ』、前掲書、86 頁
- (50) 柳谷圭子『マザー・テレサ』前掲書、87 頁
- (51) ibid.p.435